２０２３年１１月２０日

明治大学国際連携本部　各位

シックハウス、トビアス

【国際学会・シンポジウム】

「文筆における文化的な実践ワークショップ」（報告書）

本年１１月４日（土）・５日（日）の２日間にわたり、明治大学の駿河台キャンパスを会場として、国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは本学国際連携本部の「２０２３年度国際学会・シンポジウム開催助成」および、ドイツ学術交流会（DAAD）の支援を受けておる。

シンポジウムの概要

文筆のポテンシャルはその表現形式において多種多様である。文化的に異なる執筆シー ン（“Schreibszene“）の方式に応じて、文筆に内在する種々の可能性は展開する。言語と同様、文筆は、一般的表記システムのように、社会における生活を組織化する。文筆は、過去を再考する態度を活性化し、革新し、知識の文化的構造を拡大する。しかし、文筆／ライティングが、意味、権力、痕跡、執筆プロセスに対してどのような関係を持っているかは、これまで東洋・ 西洋を含む文脈ではほとんど考慮されてこなかった。この交互の空間においてこそ、 ライティングと意味構成との関係が、生産的な意味で揺さぶられる。すなわち、新たな読書の痕跡が現れるのだ。

このワークショップでは、次のような問いに焦点を当てていった：

(i)　ライティングの理論的分野：はたしてライティングと文筆にはどのような構想があるのか？外国の文字文化をエキゾチシズム化し、あるいは流用するために、どのような言説的な文章様式が存在するのか。

(ii)　文筆の歴史的分野： ライティングに沿った区別可能な段階を持つ時代区分とはどのようなものだろうか？有力なテクストの事例や、文章の遺伝的段階を再構築することは可能か？また、そこから文学テクストの歴史的評価にとって得られるものは何か。

(iii)　文筆の芸術文化的分野：文筆によりどのような芸術的プロセスが、明示的に引き起こされたのか。文筆に対する芸術的熟考はどのような文化的変化をもたらしたか？

全員の研究者が内容の深さと多彩さに豊富な研究発表ができたのは、明治大学商学部と明治大学国際連携本部の寛容なサポートがあってこそであった。お礼を申し上げます。

国際学会・シンポジウム開催後の研究交流計画について

本学会の口頭発表は、日本独文学会機関誌、査読付きの『ドイツ文学研究』、特集 171 号（２０２５年）にて掲載される予定である。編集理事会のご指導の下で、申請者は該当する発表者（申請書⑤⑥）の論文の回収または原稿校覧に務める予定である。

シンポジウムの詳細については、添付のプログラムをご参照ください。

以　上